



奥河内くろまろの郷がオープンしました（本文中に関連記事があります）

目次 / contents

新年の挨拶 2
 新年あけましておめでとうございます

ひと・まち・地域 4
 歩行者優先道路化社会実験「パークタウン・ストリート」第2弾
 実施！！ / 山本昌彰・絹原一寛・羽田拓也・橋本晋輔・中井翔太
 奥河内くろまろの郷がオープンしました
 / 鮎子田稔理・三浦健史・原田弘之 6
 京都・久美浜「田園紳士」～自分の「良心」に厳しく、まじめに
 農業に取り組む正統派の男たち～ / 原田弘之・武藤健司 8
 地域から少子高齢化への対応を考える（その9）～火葬場と墓
 地を考える～ / 森脇宏 10
 にぎわい復活の“第一章”～伊勢やまだ大学開校！～ / 高田剛司 12

きんきょう 13
 星のや京都に宿泊してきました / 山崎将也 13
 柏の葉スマートタウンは、「都市の聖地」になりうるか
 / 杉原五郎 14

まちかど 16
 白井の牧草地で野馬を思ふ / 中井翔太 16





新年あけまして
おめでとございます

代表取締役社長／森脇宏

今年度のアルパックの営業は、例年に比べて好調で、9月末には全社の営業目標の達成に目処が付き、現在、6グループすべての営業目標も達成を目前にしています。この前進は、公共投資の増加に伴って我々の業界の仕事が少し増えていることもありますが、同時に2012年春の組織再編が功を奏して全社員が奮闘したこと、さらに皆様のご支援がございました結果だと受け取っています。ご支援をいただきました皆様にお礼申し上げます。

昨年は、年明け早々からアルパックの中期戦略（経営分析、営業戦略、組織戦略）を提案し、社内議論や先行的な実践を経て充実させ、株主総会で承認を受けるとともに、今年度の方針にも反映させてきました。これらの具体化として、①コンペでの獲得率の向上、②2年前の組織再編のフォロー（追加的再編）、③東京事務所をはじめとする戦略的な人材採用（中途採用）、④将来のアルパックを支える積極的な人材採用（新卒採用）、⑤若手育成や品質向上の指針づくりと実践などを進めてきました。

こうした取り組みの具体的な前進と、営業の成果は上げてきていますが、アルパックの改革は、まだまだ途中段階です。中期戦略（営業戦略、組織戦略等）の着実な実施とともに、今年は特に①ITの活用促進、②リスク対策、③系統的な人材採用と育成を重点に取り組み、具体的に前進させることで、“持続可能な地域づくり”に貢献できる優れた組織をつくっていききたいと思えます。

アルパックは、1967年2月3日の節分の日に創立しました。節分祭で有名な吉田神社（京都）がある吉田山山麓の長屋を改装し、「アトリエ・アルパック」としてオープンしました。したがって、2年後の2017年には創業50年を迎えます。それまでの2年間で、海外や国内の社会経済情勢は大きく変わっていくことが予想されます。そうした変化に振り回されることなく、次の50年も“持続可能な地域づくり”に貢献できるアルパックとなるよう、脱皮も含めて成長していきたいと思えます。引き続き、ご指導とご支援をよろしくお願いいたします。

名誉会長・顧問／三輪泰司

今年早々に、阪神・淡路大震災20年。そして、第2次世界大戦・太平洋戦争終結から70年。

この日を待たずに、多くの同級生、同世代の方々が他界しました。平成生まれが育ってくるとともに、戦争の時代を体験してきた世代が減ってきました。

今年は日露戦争講和のポーツマス条約110年でもあります。私が生まれたのはその僅か26年後です。日露戦争なんて時代劇の世界でした。若い人たちが戦争の惨禍を理解し難いのはあたりまえです。

しかし今は、国際連合はじめ、地球規模で安全保障、経済・文化推進の機構が築かれ、戦争の惨禍が語り継がれ、日本には「平和記念館」が20以上もあるように、時代の潮流は大きく変わっています。京都市は1957年に「平和都市宣言」を発し、1978年には「世界文化自由都市」を宣言しました。

“世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超え、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流をする”都市と謳っています。丁度、関西学術研究都市の第1次提言を起草している時でした。戦争の根源は「無知と貧困」にあることは明白になっています。科学の進歩で深めてきた知識・認識・洞察を全人類の叡智として結集すること、飢餓にさらされている人々に富を分ち、文明の恩恵に浴せるようにすること、と宣言の“理想”を敷衍して「提言」に盛り込み、構想の目的としました。

京都市では、この宣言をあらゆる計画の基調に据えています。京都は歴史都市であるだけでなく、最も先端を拓く都市でもあるゆえんです。この宣言は、ビジネスにとっても根幹とすべき精神です。

アルパックを京都から起し、京都に本拠を据えてよかったと思っています。

私は、戦争が終わった時、まだ中学校の2年生・満14歳でしたが、ほんの1・2年の違いで生死を分ける時代をくぐり抜けてきました。生ある限り、平和の声を上げ、鼓舞することは、生き残らせて頂いた私たちの使命です。マララ・ユスフザイさんのように勇気と信念をもって。

本年もどうぞよろしく
お願いいたします



代表取締役会長／杉原五郎

日本の地域を、大阪のまちを、草の根から元気にしていこう。大阪府中小企業家同友会で、そんなプロジェクトを提案しています。地域にある中小企業が雇用の維持・拡大など強靱な企業づくりを進め（点による地域づくり）、企業間の連携や大学・自治体などと協働した仕事づくり（線による地域づくり）、地域の諸団体が一体となった地域まるごとの取り組み（面による地域づくり）を実践していこうとの試みです。グローバル化、少子・高齢化の進展など、日本の地域はいま大きな岐路に直面しています。中小企業を軸に、自治体、大学、経済諸団体などと力を合わせて、地域を元気にしていきたいと考えています。

取締役副社長・東京事務所長兼名古屋事務所長／堀口浩司

昨年の5月と8月にスリランカを訪問する機会がありました。5月には内乱からの戦災復興地である北部の町ジャフナの市街地と周辺の農村・漁村部を回りました。農地や樹林地は地雷の撤去を進めているため、まだ復興には時間がかかります。その反面で、漁業は船さえあれば収入の道が開け、都市部は建設業を中心とした復興需要で賑わいが戻りつつありました。地域の復興は生活の糧を得るところから始まることを実感します。観光や輸出（移出）により外部資金を獲得し、その資金でもって内需を喚起する。内発的で持続的な発展には様々な環境整備が必要であると再認識しました。我が国も大規模災害の危険性に備え、それぞれの地域の長期的・内発的な経営基盤を支援していきたいと考えています。

取締役大阪事務所長／中塚一

地域経営（エリア・マネジメント）元年！

大阪市では、大阪版 BID（Business Improvement Districts）条例が制定され、この4月より運用第1弾としてグランフロント大阪 TMO が、分担金等を活用した公共空間の管理業務をスタートされます。中心市街地やニュータウン、市街地整備の分野では「エリアマネジメントなくしては、地域再生が出来ない」との認識も共有化されてきています。一方、地方再生では人口の社会移動を止めるために「魅力ある雇用機会をどう創造していくか」が最も必要なキーワードとなっています。いよいよそれぞれの地域が、知恵と人材と資金を地域に投資し循環させていく、地域経営の時代に突入します。

取締役副社長／馬場正哲

阪神・淡路大震災から20年、この復興事業では旧来の行政主導の地縁型合意ではない地域の多様な参加の仕組みが一般化される契機となりました。

その後、紀伊半島大水害復興事業を支援し、住宅や道路基盤の復興は漸く果たせてきたところですが、山間地の暮らしと生業の創造がなければ集落の存続が危ぶまれています。

無尽蔵の森林・自然資源の活用は都市の持続発展や国土管理の懸案事項ですが、依然として行政依存の旧弊にぶつかります。地域の本来の知恵とガバナンスとネットワーク基盤の創出から取り組まなければなりません。今年も日本のまちづくり最前線です。

取締役京都事務所長／松本明

昨年初めてベトナム、ホーチミン市に大先輩のSさんを訪ねました。Sさんが関わる企業組合が現地企業と設立した合弁会社が地域開発を進めており、Sさんはその駐在コーディネータや大学講師をなさっていました。その芋づるでアジアと日本の近代史にはまっています。満州事変はなぜ、どう進んだのか。元国連難民高等弁務官で元 JICA 理事長の緒方貞子さんの博士論文「満州事変政策の形成過程」のテーマでもあります。緒方さんのお爺様が犬飼毅、お父様が外務大臣の芳沢謙吉だそうです。意志を持って学び積み重ねていくことが大切だとつくづく思いました。新しいチャレンジを楽しむ意志とゆとりを大切に一年にしたいと思います。

(株)よかネット 代表取締役（九州事務所長）

／山田龍雄

昨年度、ある自治体の公共施設等総合管理計画のお手伝いをし、人口減少・縮減化時代を迎え、公共施設の削減や統合化及び継続していく施設の長寿命化を本気になって取り組んでいかないと財政がもたないといったことを実感させられました。自治体の責任として、これに早く取り組み、実行していくかで将来、自治体力に大きな差が生じるとともに、孫・子にツケを回さないこととなります。弊社では、本年度も「公共施設マネジメント」「防災計画」「住宅地計画」「交通計画」など九州に根付き、仕事・遊びの両面でチャレンジしていきたいと考えております。本年度もご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。



ひと・まち・地域

歩行者優先道路化社会実験

「パークタウン・ストリート」第2弾実施！！

地域再生デザイングループ／山本昌彰・羽田拓也

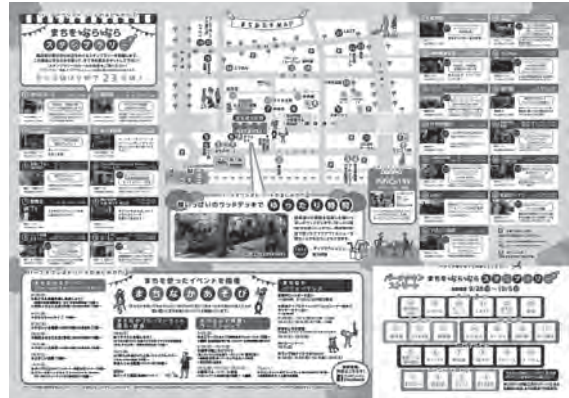
都市・地域プランニンググループ／絹原一寛・橋本晋輔・中井翔太

なぜ「歩行者優先道路化」？

ここ周南市は、山口県の中央部に位置する人口約15万人の都市。徳山動物園やコンビナートなどで有名で、かつては、山口県下でも有数の商業集積地として「賑わい」をみせていました。しかし、近年、地元百貨店の撤退などにより、その賑わいは失われ、まちの中心部の活性化が課題となっていました。

今回紹介する取り組みは、中心市街地活性化の一環で、銀座通りを「公園のように歩行者にとって歩きやすい居心地の良い空間」（＝パークタウン・ストリート）とし、まちの回遊性の向上や賑わい創出につなげていこうとするものです。車と共存させながらも、歩道を広げて、まちなかでさまざまな活動や回遊が生まれるような社会実験として、9月28日（日）からの8日間、実施しました。将来的には「これぞ周南」といえるものをめざそうと、地元関係者が一丸となり、平成25年3月に認定された中心市街地活性化基本計画で掲げたまちづくりの理念「パークタウン」の先導的事業としてスタートしたものです。

そもそもこの取り組みは、3年前に実施した市民のワークショップをきっかけに始まり、ニュースレター第174号でもとりあげましたように、平成24年、その「第1弾社会実験」を実施しています。前回は「憩い」がテーマで、一定の成果が得られましたが、今回の第2弾のテーマは「賑わい」「回遊性」



まちの回遊性を促すスタンプラリー

「歩車共存」です。以下、テーマごとに今回の取り組みの内容を紹介していきます。（山本昌彰）

「賑わい」～公園のような使いこなせる空間づくり～

従来、商店街の賑わいというと、商店や買い物客による活気など“販売・購買活動”を軸とした賑わいが連想されます。しかし、周知のように、衰退しつつあるまちにおいて再び、賑わいを取り戻すには、多面的なアプローチが求められます。

当取り組みでは、まちなかの“公共的な空間を使いこなす人々”が賑わいを生み出すと考え、ウッドデッキなどの空間づくりと並行し、まちなか活動者（プレイヤー）の募集を行い、市民による道路空間や駐車場、店先空間の利用をプログラムとして実践しました。周南市ではPRと同時に2度の説明会を実施したこともあり、楽器演奏（ライブ）・大道芸・

作品展示など多様なまちなか活動者の参加が得られました。今回、まちなかのスペースへのニーズが確認できたことも、収穫の一つではないでしょうか。

通行者から「普段は、通勤時に近くを通過するだけであるが、聞こえてくる演奏についで足を止めてしまった」という声も聞かれるなど、ウッドデッキ周辺には盛り上がりが見られ、賑わいづくりに一定の効果があったといえます。このように、まちに人が訪れ、時間を過ごす動機は多様であるということを実感しました。まずは、店舗での購買も含め、多様な来街動機が相互に助長しあう中心



ウッドデッキでの多様な活用



歩きやすく居心地のよい道路



ウッドデッキでの賑わいづくり



市街地としての将来をみんなで共有していくことができると思います。(中井翔太)

「回遊性」～素敵なお店を知ってもらおうきっかけづくり～

社会実験期間中に来訪された方に、銀座通りだけでなく、駅前の商店街等へも足を運んでいただききっかけづくりとして、各商店街を通じて協力店舗を募り、スタンプラリー及びテイクアウトメニュー提供を実施したところ、23店舗にご協力頂きました。

スタンプラリーでは、各店での商品購入に関わらずスタンプ押印を可能とし、5つの商店街で1店舗以上ずつスタンプを集めて応募すると周南市の特産品が当たる、として実施したところ、8日間の実験期間中に200通を超える応募がありました。特に土日を中心に小さな子供の親子が、マップを持ってまちを行ったり来たりする様子が見られました。

スタンプラリー参加者からは「普段、駅前には来ないがこういうお店があると初めて知った」などの意見、協力店舗からは「お店の良いPRにもなった」という声もあるなど、まちなかの回遊や店舗への来店機会の創出については一定の効果があったと言えます。

一方で、「売り上げにはあまりつながらなかった」というお店の感想もいただいており、まちなかの回遊性とあわせ、商店での購買につなげる仕掛けづくり、ひいては徳山駅前の商店街としてどうありたいかなどについて、お店と一緒に検討、実施していくことが重要だと実感しました。(羽田拓也)

「歩車共存」～片側交通通行による交通体系の検証～

今回社会実験を行った銀座通りは、徳山駅前広場につながる二車線の道路です。駅前の幹線道路として、普段は駅前広場に向かう自家用車の他、路線バ



片側交互通行による「歩車共存」

スやタクシーが往来し、決して交通量が少ないというわけではありません。そのようなところで交通規制をしてしまうと本当に大丈夫なのか？それを検証することも今回の社会実験の目的です。

社会実験では通りの一部を終日片側通行にして、その車道を狭めた部分を賑わい空間として活用しました。詳細の検証はこれからですが、私が見た範囲では、周辺道路で大きな渋滞などは発生せず、交通量への影響はほぼ見られませんでした。しかし、その一方で、荷捌きやタクシー乗降への影響などについて意見が出されています。

歩車共存と一言で言っても、この場所として大切にしたい交通手段は何なのか、その優先順位がなければ、限られた道路空間の中でうまく共存できません。今回の社会実験からこの通りや中心市街地としてその優先順位を明確にしていくことの必要性を感じました。(橋本晋輔)

総括～空間再編による歩いて楽しいまちづくりへの期待～

社会実験は事故もなく無事に終了しました。現在、来街者や商店主、交通事業者へのアンケート調査を整理、分析しているところですが、実施期間中でも来街者や商店主の方々から賛否両論、さまざまなご意見を頂きました。一過性の実験で終わらせることなく、これをきっかけに周南市の中心市街地、商店街の空間のあり方を関係者で話し合い、次のステップに進んでいくことが重要だと考えます。

折しも、京都の四条通、大阪の御堂筋でも道路空間の再編が発表され、四条通では来年度の供用開始に向けて歩道部分の拡幅工事も進められています。自動車交通量の減少やにぎわいある空間づくりへの期待から、このような歩行者主体の道路空間への再編がますます加速していくでしょう。とりわけ周南市のような自動車交通が主体のまちはハードルが高いですが、今回の試みは一石を投じるものであり、今後の具体化に注目して頂ければと思います。

なお、次号では、当社もまちづくりに関わっている四条通、御堂筋の状況についても詳しくご紹介しながら、道路空間の今後のあり方についてさらに考えてみたいと思います。(絹原一寛)



ひと・まち・地域

奥河内くろまろの郷がオープンしました

建築プランニング・デザイングループ／鮎子田稔理・三浦健史

地域産業イノベーショングループ／原田弘之

大阪府河内長野市の高向^{たこう}エリアに地域活性・交流拠点施設として奥河内くろまろの郷がオープンしました。

歴史通の方なら「高向」+「くろまろ」ですぐにおわかりかと思いますが飛鳥時代に南淵請安らとともに国費留学生として隋に渡り帰国後に国博士として活躍した高向玄理^{たかむこのくろまろ}が本拠地としていたのがこの高向地域といわれています。

河内長野市では平成23年より「ちかくて・ふかい」をキーワードに「奥河内構想」のプロモーションを展開しています。これは若手職員で構成される少子対策プロジェクトチームの発案によるもので、河内長野市を中心とする大阪南東部の緑豊かなエリアを「奥河内」と名付け、大阪都心部から電車で30分という利便性が高いエリアでありながら緑豊かな環境の中で日帰りトレッキングやカヤックなどのアウトドアライフを楽しむことができる魅力あふれる地域であることをPRしていこうというものです。

奥河内くろまろの郷はこの「奥河内構想」のイメージを継承しつつ、多品種の農産物や良質な林産物にも恵まれ、また、前述のように古来より培われた歴史文化の深い味わいを楽しみながら学べるなど、多くの魅力を有したこの地域の情報発信とヒト・モノ・コトをつなげる交流施設として整備されました。

施設全体は奥河内の情報発信機能と奥河内エリアの玄関口の機能を担った「奥河内ビジターセンター」とJA大阪南直営の農産物直売所「あすかてくるで河内長野店」となっています。今回アルパックは敷地約2haの全体配置計画と奥河内ビジターセンターの設計監理、管理運営の検討について関わらせていただきました。

奥河内ビジターセンターでは、地域情報の発信機能として地域産品の展示販売コーナー、様々な体験や研修も行える多目的スペースに加えイートインスペースがあり、焼きたての天然酵母パンや石窯ピ

ザ、河内長野の旬の食材を使ったスープやジュースが楽しめるようになっています。

アルパックの業務は、平成25年春からスタートしましたが、市には市制60周年である平成26年中に施設をオープンさせたいという意向があり、基本設計から工事完了まで非常にタイトなスケジュールでした。設計当初は管理運営者が決まっていませんでしたので、できるだけフレキシブルに使用できる空間としました。設計が終盤に差し掛かった平成26年春に管理運営者が決定しました。センコー・電通・アッティエヴォ共同連合体がプロポーザル方式により指定管理者として選定され、決定の後すぐに共同連合体の意向を反映してイートイン工房内の厨房機器を見直し設計完了して工事に取りかかりました。

設計にあたって河内長野市芝田市長より「他にはない施設をつくって欲しい」という大変難しい命題をいただいていた。河内長野市という市の特性やこれまで展開されてきた奥河内構想を読み込んでいく過程で、シンプルでありながら木の暖かみや無垢の感じをモチーフとすることで、河内長野市らしい＝他にはない建物となることをめざしました。

建物の内外装の木材には河内材を使用、開口部は建物と外部空間が一体となるよう大きめの木製サッシとし、周囲の里山風景に溶け込むような外観としました。



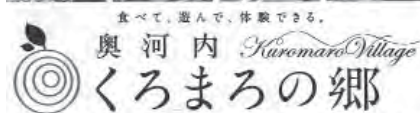


近隣には既存施設としてアルパックで設計を行い平成2年に開園した大阪府立花の文化園や河内長野市立歴史学習館「くろまる館」、林業総合センター「木根館」があり、エリア全体で「あそぶ・まなぶ・たべる」を楽しめるエリアとなっており、今回の配置計画ではこれらのエリアと奥河内くろまるの郷の動線が滑らかにつながるように心がけました。

また、この敷地はもともと花の文化園の駐車場として使われていて、引き続き花の文化園のお客様も駐車されるため、通常のこういった直売所や飲食スペースよりも駐車時間が長くなることが予想されることから、普通車300台・大型車6台を確保するようにしました。

オープニングセレモニーが行われた11月29日午前中は前日予報では降水確率70%でしたが、雨は降らずセレモニーの間には時折日差しがこぼれ、今回関わったすべての人の労をねぎらっているかのようでした。

地域の方や近隣の方にとっても待ちに待ったオープンとなり、あすかてくるで河内長野店には店内に入るまでに長蛇の列ができ、奥河内ビジター



センターでも、パンを買うのに30分以上の行列ができていました。地元でつくられたジャムなどの加工品や木工品も人気を集めていました。

アルパックは今回プロポーザルで選定されこのお仕事をさせていただきましたが、企画提案書を作成するのに先立って敷地を訪れたときには、真冬の寒い日ということもあり、この広い空間にほとんど人影がありませんでした。そのときに1本のクスノキに一目惚れし、このクスノキをシンボルツリーとして計画していこうと決めました。今後はこのクスノキが奥河内くろまるの郷の成長を見守ってくれることと思います。

今年夏頃には、奥河内ビジターセンターの横に河内長野産の野菜を使った料理をビュッフェ形式で楽しめる地産地消レストランがオープンする予定です。私たちが奥河内へ通う日々がまだしばらく続きます。

<奥河内くろまるの郷>

住所：大阪府河内長野市高向1218番地1

Tel：0721-56-9606

ホームページ：<http://okukawachi.or.jp/>

Facebook：<https://www.facebook.com/kawachikyoten>





ひと・まち・地域

京都・久美浜「田園紳士」

～自分の「良心」に厳しく、まじめに

農業に取り組む正統派の男たち～

地域産業イノベーショングループ／原田弘之・武藤健司

京都・久美浜「田園紳士」が登場！

昨年の8月の猛暑日、京都・東本願寺前のマルシェに、ピンク色のポロシャツ、麦わら帽子のちょっとしゃれたいでたちで野菜を販売する男たちがいた。ブースには、桃、ミデイトマト、枝豆、玉ねぎ、じゃがいも、こどもピーマンなどが並び、「京都・久美浜『田園紳士』」ののぼりがはためく。京都府の最北西端の日本海を望む京丹后市久美浜から早朝に出発し、この地にやってきたのだ。

平成25年度から、地域活性化のプラットフォームである久美浜まるごとプロデューズ協議会の取組として、農家の有志8人が集まり、どうすればより有利に農産物を販売できるかを検討してきた（その過程はニュースレター185号を参照）。そして、平成26年度から久美浜特産の牡蠣殻を肥料として使うことも含む久美浜版GAP（安心安全を基軸とする生産管理の仕組み）を構築・採用し、農産物を栽培してきた。

しかし、販路開拓の商談の場でも、なかなか思う成果が出なかった。何か足りない。メンバーは議論を重ねた。

「田舎紳士論」から「田園紳士」へ

久美浜町誌をめくっていると、「田舎紳士論」と



濃厚なトマトジュース。飲むと体の中で血に変わる気がする...

いう言葉に出会った。明治時代の自由民権運動の頃、徳富蘇峰が唱えた「地方における独立自営民」への期待を込めた思想だ。町誌では、その論に共鳴した久美浜の若者が仲間とともにむらづくりの取組に乗り出したとある。

久美浜は、江戸時代は北前船の寄港地として栄え、幕府の天領であった。明治に入ると、当初は丹後、丹波など広範囲を含む「久美浜縣」が置かれたが、明治4年には廃藩置県によりそれも廃止された。中心地から辺境の地になり、そうした状況もあって、「田舎紳士論」に共感し、むらづくりに取り組む若者が現れたのだらう。

こうした明治時代の意志を、もう一度、平成の今に引き継ごうというのが「田園紳士」という古くて、新しい農業スタイルだ。自分たちに足りなかったのは何のために農産物をつくっているのかという思いやそれを伝える言葉だった。「田園紳士の約束」を3つ決めている。①自ら「久美浜版GAP憲章」を定め、安心・安全な農産物を子どもたちに届ける。②海風に運ばれるミネラルなど、海のある久美浜のロケーションを活かし、品質にこだわった農産物を育てる。③誇りを持ち、農業にまじめに取り組む、社会や地域に貢献する。

野菜を飾り・つくり・食べる「ベジタブルアレンジメント体験」との連携

昨年の11月、久美浜に10組以上の親子が集まった。「田園紳士」と一般社団法人ベジタブルアレン



久美浜在住のアートプロデューサーによるマルシェの演出



消化器系の模型がついたエプロンで講座。小腸が伸びる。

ジメント協会とのコラボによる食育講座だ。お花は家で目立つところに飾って楽しむが、野菜は冷蔵庫など目立たないところにしか置かれない。でも野菜にも花があり、根っこがあり、茎があり、葉がある。美しいものやかわいいもの、味わい深いものもたくさんある。けれど、一般的には必要な部分だけをカットして売られている。もったいない。

こうした問題意識で、暮らしの中で、「野菜」をもっと見える化し、食べるだけではなく、飾りとしても活用したり、野菜の世界の豊かさを子どもに伝えられるようにしたいという、新しい食育の観点から発案されたのが「ベジタブルアレンジメント」の発想だ。こうした考え方に、「田園紳士」も共鳴し、一緒にイベントをやることになった。

はじめに食べ物に関する楽しい講座。野菜に関するクイズや消化器系の模型がついた特殊なエプロ

ンを使って身体の中の食べものの動きの実演。その後、田園紳士の野菜を使ったアレンジメントによる作品づくり。そしてトルティーヤとバターナッツケーキの料理体験、最後にみんなで試食という盛りだくさんな内容。このように「田園紳士」は共感できる相手とイベントなどを通じた連携を図る。

「売る」んじゃない「届ける」んだ

現在、久美浜まるごとプロデュース協議会では、農産物の販路開拓のために、東京や大阪、京都などで商談活動やマルシェなどでの販売活動を行っている。その事務局として、平成25年度から、都会からやって来た青年1人が久美浜に住みながら、農家や販路などを日々動き回りながら全体調整を行っている。

今年には正念場の年だ。上記の活動を軌道に乗せて、事業活動として経済的に自立することが目標だ。条件のよい、安定した販路を探し出す一方で、出荷してもらえる農家をスカウトし、全体の生産量を増やさないとビジネスにはならない。加工品開発も検討を始める。その際、品質の維持や、「田園紳士」という思いも共有する仲間であることも条件だ。大事なことは、農産物の単なる「販売」ではなく、思いも含めて「届ける」という姿勢だ。難しい課題であるが前に進むしかない。

一年後には、久美浜のたくさんの農家の間で、そして都会のマーケットで、より一層「田園紳士」という言葉が広まっているはずだ。



子どものつくった野菜アレンジメントの作品。キラキラが好き。



野菜アレンジメントは親しみと温かみを感じる。



田園紳士のロゴ。飾り文字の中に野菜が隠れている。さていくつ？



地域から少子高齢化への対応を考える

その9～火葬場と墓地を考える～

／代表取締役社長 森脇宏

前号 (No.188) の「その8」では、関西 (2府4県) における介護需要の急増ぶりを具体的に推計し、その対応の難しさを考察してみました。

今回は、高齢化に伴って死亡者数も増加するため、これによって生じる問題のうち、火葬場と墓地について、火葬場に関する具体的な需要も推計しながら考察してみます。

死亡者数の推計

関西における府県別死亡者数 (年平均) は、前々号 (No.187) の「その7」でも推計しましたが、国立社会保障・人口問題研究所の「日本の地域別将来推計人口 (平成25 (2013) 年3月推計)」で示された生残率や純移動率を用いて、表1に示すように推計できます。現状 (2006年～2010年) で関西全体の死亡者数は、年平均で約18万人ですが、15年後には約26万人と1.45倍に、30年後には約29万人と1.6倍になると推計されます。

これを府県ごとにみると、大阪府の増加が著しく、15年後には1.55倍に、30年後には1.75倍になると推計されます。他の府県は、関西全体の伸び率程度か、それより低い伸び率にとどまっています。

表1. 府県別の年間死亡者数の将来予測

	A. 2005年 ～2010年	B. 2020年 ～2025年	C. 2035年 ～2040年	B/A	C/A
滋賀県	10,981	15,306	18,372	1.39	1.67
京都府	23,316	32,875	38,007	1.41	1.63
大阪府	72,382	112,234	126,954	1.55	1.75
兵庫県	49,462	67,996	76,548	1.37	1.55
奈良県	12,226	17,046	19,326	1.39	1.58
和歌山県	11,624	13,946	13,900	1.20	1.20
関西合計	179,990	259,403	293,107	1.44	1.63

(資料) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口 (平成25 (2013) 年3月推計)」を基に推計した。

将来必要となる火葬能力の推計

府県別の年間死亡者数を基に、将来必要となる火葬能力について推計してみます。必要な火葬能力とは、ピーク日に火葬できる最大件数 (体/日) です。通常は、平均日の火葬件数の2.0～3.0倍として算

表2. 府県別火葬能力の現況と将来必要な能力

	現状	将来必要な能力		現状と将来の比較	
	A. 1997年 (平成9年) (体/日)	B. 2020年 ～2025年 (体/日)	C. 2035年 ～2040年 (体/日)	B/A	C/A
滋賀県	117	105	126	0.90	1.08
京都府	200	225	260	1.13	1.30
大阪府	389	769	870	1.98	2.24
兵庫県	379	466	524	1.23	1.38
奈良県	129	117	132	0.91	1.03
和歌山県	180	96	95	0.53	0.53
関西合計	1,394	1,777	2,008	1.27	1.44

(資料) 現能力は、厚生省生活衛生局企画課「全国火葬場資料集 (平成9年)」による。将来需要は、独自に推計した。

定しますので、ここでは一律2.5倍として試算しています。こうした将来必要となる火葬能力と、現在の火葬能力を比べたのが表2です。ただし、府県別の現能力を示す最近の資料が見当たらず、ここで掲載しているのは、厚生省生活衛生局企画課「全国火葬場資料集 (平成9年)」のデータで、かなり古いことに十分留意してください。

将来必要な火葬能力を、現状の火葬能力と比べると、大阪府のギャップが大きく目立っています。2020年～2025年の頃には現状 (1997年) の約2倍に、2035年～2040年の頃には現状の2.24倍に増強する必要があります。

一方、大阪府以外は、それほど大きなギャップはなく、兵庫県における2020年～2025年の1.23倍、2035年～2040年の1.38倍が最も大きな比率であり、数字だけ眺めると、それほど難しい目標ではないのかもしれませんが、また、滋賀県、奈良県では、現状の能力程度で対応可能で、和歌山県に至っては、半減してもいいような数字が試算されています。しかしながら、府県別に考察する前提は、各府県内で火葬場の相互利用 (広域調整) が可能であることですから、交通の便がよく府域が狭い大阪府なら現実的ですが、そうではない府県では、相互利用 (広域調整) は容易ではないので、そう単純に評価することはできません。例えば、和歌山県の広大な山間地では、近隣の各市町村間で火葬場を相互利用

しようにも、移動時間が掛かりすぎるため、利用効率の低い火葬場を独自に持たざるを得ない自治体があるだろうと想像されます。したがって、これらの需給関係を考察するには、各府県内を幾つかに分割した地域別に検証することが必要だと思えます。

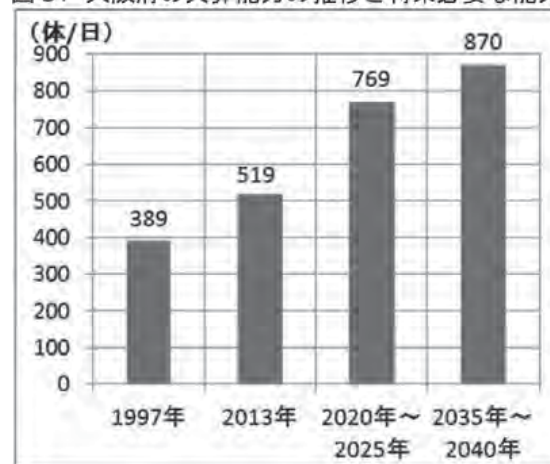
大阪府の火葬能力の考察

火葬能力の整備の面で最も厳しい大阪府ですが、府内自治体も能力増強の努力を払ってきています。大阪府では、大規模災害への対応のため「大阪府広域火葬計画（平成26年度版）」を策定しており、その中に大阪府内の火葬場整備状況一覧（平成25年8月現在）が整理されており、最近の火葬能力が把握できます（他府県での同様の情報は、ネットでは検索できませんでした）。これによると、2013年時点での大阪府内の最大火葬能力は519体/日となっていますので、1997年の389体/日から16年後の2013年までに、実数で130体/日、比率で1.33倍の能力増強が行われています。

こうした努力が払われていますが、今後については、より一層厳しい状況が予想されます。すなわち、2013年時点で、519体/日の火葬能力がありますが、これを7年～12年後の2020年～2025年には、769体/日の火葬能力までに増強する必要があります。これは、実数で250体/日、比率で1.48倍の能力増強ですので、1997年から2013年にかけての増強を大きく上回る増強が求められています。

なお、2020年～2025年以降も、能力増強は求められますが、2035年～2040年には870体/日の火葬能力が必要ですので、実数で101体/日、比率で1.13倍の能力増強ですから、その能力増強の程度はかなり緩和されます。つまり今後の10年ほど（7年～12年後まで）の間、火葬場の能力を増強させる必要度がピークを迎えると考えられ、これまで以上の能力増強をしないと、火葬場が決定的に足りない状況が生じかねないと考えられます。

図3. 大阪府の火葬能力の推移と将来必要な能力



（資料）2013年データは、「大阪府広域火葬計画（平成26年度版）」により、他のデータは表2による。

墓地に関する考察

墓地についても、死亡者数の増加に伴って埋葬数も増加していくと考えられます。したがって、いずれ墓地不足という事態も生じる可能性はあります。従来のように、郊外部での墓地開発は進むとは思われますが、最近は交通の便も重視されていますので、外延化も限界があると思われます。したがって、郊外で売れ残った住宅地の転用や、市街地内の工場跡地の転用なども、今後登場してくるかも知れません。

ただし、単純に死亡者数に墓地の面積需要が比例するとは考えられません。これまでの墓地の中で多くを占めていた「土地付きの平面墓地」の比率は、地価や適地の制約だけでなく、承継問題もあって低下していくと予想されます。これに代わって「立体式納棺堂」や「合葬式墓地」などが登場してきます。さらに、最近増えてきた樹木葬や、海外で多い芝生墓地が増えると、区画面積が小さくなるので、面積は抑制されてきます。また、散骨などが増えると、埋葬そのものも、単純に死亡者数に比例して増加するとは考えにくくなってきます。

今後の墓地計画には、これらのニーズを正確に把握し反映させていく必要があると考えられます。



にぎわい復活の“第一章”

～伊勢やまだ大学開校！～

地域産業イノベーショングループ／高田剛司

伊勢やまだ大学とは

昨年、ニュースレター 184 号において、伊勢市の中心市街地「外宮のまち・山田」で面白い活動が生まれそうなことを“序章”としてご紹介しました。

それから約一年。伊勢市商店街連合会の青年部有志によって、いよいよ“第一章”ともいべき、新たな動きが始まりました。昨年 11 月 9 日の「伊勢やまだ大学」の開校です。この伊勢やまだ大学は、山田の地域全体、特に商店街をキャンパスに見立て、「学びと交流の場」として開設されました。

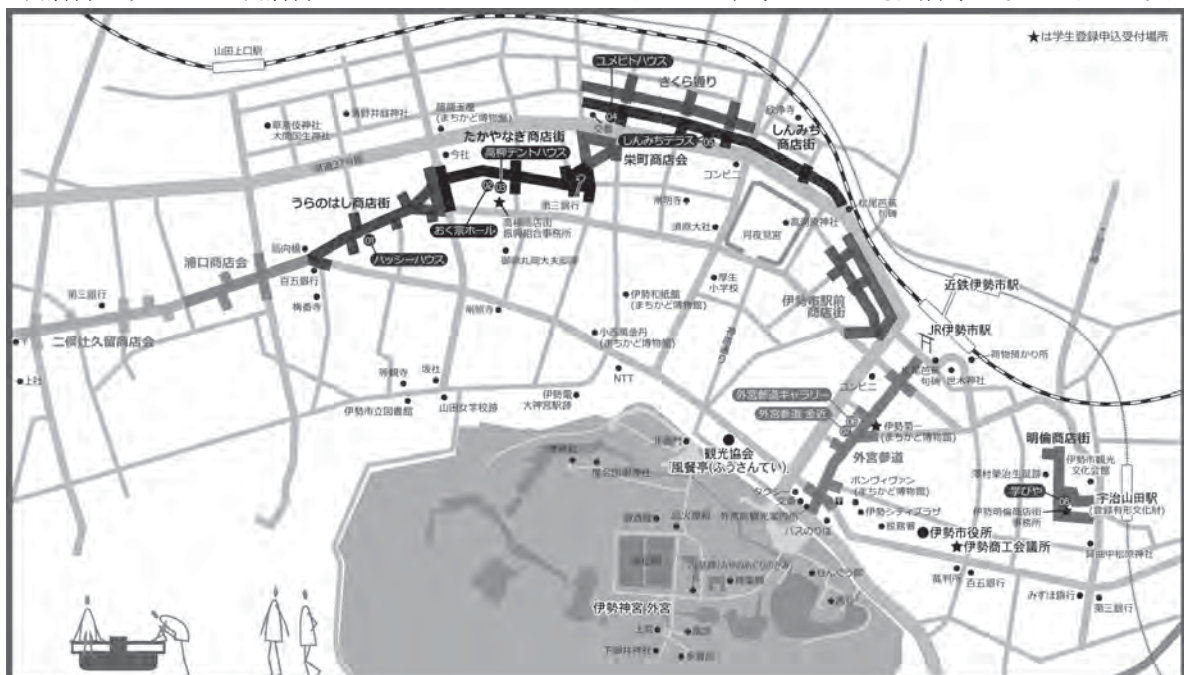
おかげ横丁などでにぎわう内宮周辺に比べて、人通りが少ない外宮周辺。それでも、一昨年は式年遷宮、昨年はおかげ参りの年だったので、多くの観光客が訪れました。今回の遷宮によるまちの変化の特徴は、外宮に「せんぐう館」がオープンし、外宮参道に多くの飲食店が立地して、外宮周辺のにぎわいを取り戻しつつある点です。しかし、正確に言えば、伊勢市駅から外宮までの外宮参道を中心に、にぎわいが生まれてきたところであり、伊勢市の 10 の商店街のうち 9 つの商店街が立地しているエリア

は、依然として人通りも少なく、多くの空き店舗が存在しています。

外宮のまち山田

外宮周辺のまちは、かつて「山田」と呼ばれていました。内宮周辺は「宇治」であり、伊勢市が「宇治山田市」とされていた時期もあります。江戸時代には、宮川をわたって伊勢に入った参拝客は、神宮にお参りする前に、その境界の山田で宿泊し、豪華な食事や酒の振る舞いを受けたといわれています。したがって、厳かな神宮への参拝に対して、旅の楽しみの一つでもある非日常の娯楽の場が山田にはあり、また、一方では伊勢の庶民の暮らしも営まれてきたといえます。

神領民と言われている伊勢の人々の暮らしはどうであったのか、20 年に一度の遷宮を千年以上も続けてきた人々の今の生活文化はどのようなのか、また、地方から大勢の参拝客を迎え、もてなす“ハレ”の様子はどうであったのか、興味は尽きません。さらに、これからの 20 年を考えたときに、今の伊勢市民の人々にも伝承されるべき風習等もあると思います。



伊勢やまだ大学のキャンパス



「伊勢やまだ大学」のパンフレット
伊勢市内（外宮周辺）の商店街や店舗、観光案内所
などで入手できます



伊勢やまだ大学の開校式の様子



そこで、多くの人々が集い、にぎわい、地域が活性化するために、「外宮のまち・山田」の魅力を再発見し、伝えていく場として「伊勢やまだ大学」のプロジェクトが立ち上がったのです。

何が学べるのか？

大学では、伊勢市民に伝わる生活文化や外宮のことなどが学べる「特別講座」と、商店街の店主が講師となり、それぞれの専門知識に触れることができる「お店ゼミ」の2つがあります。特別講座は昨年11月から今年1月までに8回予定され、来年度以降は、さらに充実していく予定です。お店ゼミは2月と8月の各1ヶ月間、講師のお店が教室となって開催される予定です。

また、大学といえばサークル活動も楽しみの一つ。新たに「伊勢やまだ合唱団」が誕生し、各商店街の拠点を練習会場に、外宮に奉納披露することを目標として、活動を1月から開始します。その他、劇団などのサークル活動や文化祭といったイベント

など多彩な展開の可能性が広がっています。

いずれにしても、立ち上がったばかりの大学であり、これから商店街だけでなく、市民や学生の力も得て、みんなの手作りで作り上げていく大学でもあります。どのようなコラボレーションと新たな活動が生まれるのか、とても楽しみです。

あなたも学生になれる！

伊勢やまだ大学は、誰でも学生になることができます。大学のホームページでも入校案内を掲載していますが、当面は実際の交流と伊勢に来ていただくことを重視して、直接、商店街内の拠点で申し込みをしていただくようになっています（初回登録料500円、年会費無料）。伊勢やまだ大学のホームページと公式フェイスブックをチェックし、今年はずぜひ、伊勢にお越しください。

<伊勢やまだ大学>

ホームページ：<http://ise-yamada.jp/>

Facebook：<https://www.facebook.com/iseyamada>



星のや京都に宿泊してきました

東京事務所／山崎将也

昨年9月6日に行われたアルパック全社研修会でのグループワーク提案一位の副賞として宿泊優待券を頂いた、星のや京都に泊まってきました。宿泊にあつ

ては、研修会の基調講演で星のや京都総支配人酒井俊之氏のお話の中にもあった「脱コモディティ化による魅力創造とは何か」を体験することを楽しみにしてきました。

紅葉の時期にはまだ少し早い10月末、昼前に嵐山に到着し、天龍寺から常寂光寺、落柿舎、二尊院と拝観した後、夕刻に渡月橋を渡り、送迎用の上り棧橋か

ら屋形船に揺られ星のや京都さんに向かいました。送迎用の船は2艘で往復しているため、待合所で船の到着を待つのですが、この待っている間に弥が上にも期待が高まってきます。

船に乗り川上に向かうと少しずつ川幅が狭くなり、山容が目の前に迫ってくる様を楽しんでいるうちに到着しました。

普通の旅館ではまず和室に通



され、お茶を飲みながら案内や説明を受けますが、星のやでは、まず寝室に通され窓際の大きなベンチソファに寝転がりながら説明を聞くという、部屋に入った瞬間からくつろぎの時間を作り出してくれます。

夜は完全に静寂に包まれ、虫の声と大堰川の微かな川音をBGMに星空を眺めて過ごすのは最高の贅沢と感じました。

翌朝、朝食は部屋まで給仕してもらいましたが、朝から鍋料理を出され、ちょっとした衝撃を受けます。朝日を浴びながらの鍋は初めての体験でしたが、野菜や茸がふんだんに入った体に優しく沁み入る味でした。

午前9時から奥の庭では、茂山千五郎家による狂言「蝸牛」が演じられ、初めて見る人にも非常に分かりやすく面白い内容で、朝鍋に続く朝狂言で元気をもらいました。

狂言を堪能した後、あつとい

う間にチェックアウトの時間となり、後ろ髪引かれながら行きと同様、屋形船で渡月橋まで送ってもらい、夢見心地な時間は終了しました。

今回は、蔵をリノベーションしたサロンや、空中茶室など楽しみきれなかった施設もありましたが、一泊だけではもったいない、数日ゆっくり滞在したいと思わせるロケーションであり、施設であり、サービスでした。

こちらの常識や期待を少しずらしてサービスを提供することで、ちょっとした驚きや新鮮な楽しさが得られ、その先の新たな期待を抱かせます。研修会の中で酒井氏が「顧客の目を覚ますサービス」と仰っていましたが、泊まる側にも既成概念があり、知らず知らず楽しみ方を狭めてしまっているのかもしれないと感じました。

最後に、酒井俊之総支配人をはじめ星のや京都の従業員の皆様に



幻想的な雰囲気を出す水の庭



部屋からの眺め（大堰川と小倉山）

は、上質な非日常を提供頂きましたことに厚く御礼申し上げます。

皆様も機会がありましたら、是非宿泊してみてください。心が洗われますよ。

柏の葉スマートタウンは、「都市の聖地」になりうるか

代表取締役会長／杉原五郎

2014年の12月、都市計画コンサルタント協会主催の見学会で、柏の葉スマートタウン（千葉県柏市）を訪れました。見学会には東京圏を中心に、地方からも含め、自治体関係者、コンサルタントなど20名余が参加しました。まちの概要と印象について報告します。

柏の葉スマートタウンはどんなまち？

東京の秋葉原からつくばエクスプレス（2005年開業）で30分の所に、柏の葉キャンパス駅があ



星のやへ向かう屋形船

ります。この駅を中心に柏の葉国際キャンパスタウンが広がっています。キャンパスタウンには、東京大学と千葉大学のキャンパスのほか、国立がん研究センターや財務省の研修施設などが立地しています。駅周辺の街区には、住宅、商業・業務施設（ららぽーと等）、ホテルなどが集積しています。人口は、現時点では6000人ほどで、将来的には25万人が想定されています。

駅から至近の所に、「柏の葉アーバンデザインセンター」(UDCK)があります。ここは、「市民と行政、企業、大学など多様な主体が連携してまちづくりを進めていくための拠点」とされています。

「柏の葉スマートシティミュージアム」で、都市開発の概要、まちの将来像などについて説明を受けました。このまちは、千葉県施行の土地区画整理事業によって都市基盤整備が行われ、三井不動産によって住宅や商業・業務施設等の民間開発が進展しています。コミュニティサイクル（自転車の貸出・返却が自由にできる）、マルチモビリティシェアリング（電動バイク、電気自動車など移動手段の共有で、CO²排出量を減らす）の社会実験が取り組まれています。

柏の葉スマートタウンは、ハードとソフトの最新技術を駆使した先導的な新市街地と言えます。

国内はもとより、アジアや欧州など海外からの視察団が頻繁に訪れ（月に500人～600人）、いま最も注目を浴びているまちのようです。

柏の葉オープン・イノベーション・ラボ (KOIL) は何をするところ？

KOILは、三井不動産が経営するオープンイノベーション施設です。協働のワーキングスペース、参加者の化学反応の場を提供するスタジオ、さまざまな人々の交流の場となるカフェ、3Dプリンターなど最新機器によるものづくりの工房、ミーティングルームを備えています。KOILは、さしずめナレッジサロン（2014年春、グランフロント大阪に誕生）の柏の葉タウン版といったところ。視察の当日、筑波大学の先生を講師とするセミナーが数十人規模で開催され、活気にあふれた様子を目にすることができました。

東京の都心から30分、筑波研究学園都市に近接しているという好立地に恵まれ、近くに東京大学、千葉大学、筑波大学など学術研究機能が集積していることがオープンイノベーションラボ成立の必要条件と理解しました。

柏の葉スマートシティは、「都市の聖地」になるのだろうか

視察を終えて、懇親会では、都市コン関西で新たに立ち上げられた「都市の聖地づくり研究会」のことが話題になりました。はた



柏の葉キャンパス駅の周辺



モビリティレポートの案内版

して、柏の葉スマートタウンは、誰もが魅力を感じ、訪れ、住みたく感じるような「都市の聖地」になるのだろうか。

関西からの参加者から、柏の葉スマートタウンについてその先進的な試みにそれなりの評価をしながらも、「こざれいだが少し無機質な感じ」「人間の臭いが欲しい」「住みたいまちとしての魅力に乏しい」などの率直な感想がでました。

新市街地を誰もが親しめるまちにしていくには、時間もかかる、人間的な営みを支えるソフト（人々の経験と知恵）も必要であると感じました。「まちづくり」も重要ですが、「まち育て」の視点も大切と言われています。今回の柏の葉スマートタウン視察に参加して、まちをつくり、まちを育てていくことの重要性和難しさを改めて実感しました。

白井の牧草地で野馬を思ふ

都市・地域プランニンググループ／中井翔太



品川駅から成田空港方面へ1時間ほど。北総線に揺られると、沿線に見えてくるのは主に戸建て・共同住宅からなる千葉ニュータウンの街並みです。アルパックでは、現在、千葉ニュータウンの西側を市域の一部とする白井市で総合計画と都市マスタープラン策定のお手伝いをさせて頂いています。市内にある鉄道駅は2つで、どちらもニュータウンの中心部に位置しているため、降車すると住宅地の印象が強いのですが、市内の大半は農耕地や樹林地、その他自然的な土地利用が卓越しています。

昨年11月の肌寒さが感じられる某日、市内を自転車で散策してきました。市街地の縁辺部の街並みに、違和感を感じました。近年新たに開発された戸建ての住宅地の合間にぽっかりと草原が見え

るのです。それは、住宅の建設を待つ造成地の草地とも、手入れを怠った荒地とも違い、天気がよければ寝転がってみたいとさえ思える、どこか柔らかな印象を受ける草地です。実はこの草原、牧草地だったのです。水はけが良い下総台地ならではの風景に新鮮さを感じたのです。特に関西ではあまり目にできません！

白井市の歴史を紐解くと、この地域はかつて徳川幕府の旗本領で、幕府の軍用馬を捕獲・育成する御用牧であり、年に一度は、野馬捕りが行われていたといえます。この地の有力な農民は牧草地の管理を任せられ、牧士と呼ばれたそうです。つまり、開発地の合間に見えた草原も、古来より地域の人々の生業と密接な関係にある文化的景観なのです。現在では、虫食い状に住宅地が見られる一

帯ですが、かつての大草原に駆ける野馬の情景に思いを馳せずにはられません。住宅地が変わっていく牧草地の現状を考えると、牧草の生産地としての需要は限られたものとなってきているのでしょうか、何らかの新たな価値を見出して、是非後世にも残して行って欲しいものです。

私は関東・関西間の移動に東海道新幹線を利用しますが、白井の原っぱにまつわるストーリーを知った後は、品川駅から約2時間を過ぎたあたりで携帯電話の地図を開きます。すると表示される地名は「関ヶ原町」。白井で育った軍馬のかつての行軍を想像すると、移動の疲れもちっほけなものに感じられるのです。



かつて武豊らを輩出した競馬学校
何かと馬に縁のある地である



白井の集落に見られる長屋門
かつては、馬屋としても使われたとか

arpak アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates · Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82
大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F
東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F
九州事務所 (株) よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikito ペーパーを使用しています。